

月刊

morit

モリトミライ

12  
2023.06

# 森の未来は 人の未来

コンクリート、プラスチック、石油、電気など  
さまざまな材料、エネルギー源が

誕生したことによって活用機会が減少した木材。

しかし、近年は技術開発や発想の転換による

新たな活用法が誕生している。

これまで積極的に活用されてこなかった

森林の活用策を探る住民グループもあり、

森林資源の持続可能性を意識した動きが広がる。

「森の未来は、人の未来」。

未来を豊かにしようとする

取り組みを紹介する。



「ゴオーン、ゴオーン」。南部町の公営スポーツセンター隣地に建つ発電所。断続的に響く重低音に混ざって、「ごん」と時折軽い音が聞こえてくる。正体は何かと注意深く施設内を見渡すと、ひとさわ大きな機械の下部から小さな黒い塊が排出されている。「これはバイオ炭と言います。環境を守りなが



バイオマスガス化発電を行う機械の一部。機械の下部からバイオ炭が排出される  
＝南部町内



発電所で生成されたバイオ炭

# 技術、発想：広がる可能性

ら経済を回すパワーを秘めた、まさに「可能性の塊」です。発電所を運営する特定の会社「南部町バイオマスエナジー」の担当者が、熱っぽく説明した。

南部町バイオマスエナジーは、建設コンサルタントの「長大」（東京）など3社で設立。2021年、町内に木質バイオマスガス化発電所が完成し、発電を行っている。木質

チップを使うのは通常のバイオマス発電と同じだが、通常がチップを直接燃やして発電するのに対し、ガス化発電はチップから抽出したガスのエネルギーで発電する。ガスを抽出する工程で副産物として生成されるのが「バイオ炭」だ。

「直接木を燃やすと木が蓄えていた二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)は空气中に放出されますが、ガス化発電ではCO<sub>2</sub>がバイオ炭に固定されます」と長大の竹下光雄課長。その炭を土壌改良剤などとして活用することで、保水力や透水性を高めたり、微生物の働きを活発

にしたりの効果があるという。「バイオ炭を畑の土にすき込むと、長期間にわたるCO<sub>2</sub>固定と農業の生産性向上が両立します」と強調する。南部町バイオマスエナジーは、バイオ炭の農業利用の有用性を示すため、稼働に合

わせて農地での試用をスタート。町内外の農家ら約40軒が協力して米や茶、サツマイモ、あけぼの大豆、ブドウなどを育てる田畑にバイオ炭を使い、いずれの作物でも収穫量向上や食味の改善といった結果が出た。「サツマイモは収穫量が前



「発電所やバイオ炭で、林業や農業の未来を明るくしたい」と話す長大の竹下光雄課長(左)と、グリーン・ワンの樋口真之代表 ー南部町内

## ワード解説

## バイオ炭

木や竹、鶏糞などを炭化させた固形物。木材を低酸素状態で加熱することなどで発生させたガスのエネルギーで電気を作る「木質バイオマスガス化発電」の副産物としても生成される。土壌改良の効果があるとされ、農林水産省が2021年に策定した「みどりの食料システム戦略」で明記するなど国も農地への利用を推奨している。



発電所が使っている未利用材。曲がっていたり、細かったり、内部が朽ちていたりして、従来はほとんど価値がなかった  
=南部町内



県産スギ材でリノベーションした旭陽電気の本社。ビジネスだけでなく、リクルートでも好影響が生まれている(旭陽電気提供)

年の2倍近くになりました。協力農家の男性(南部町)はその成果に驚く。現在のデータは協力農家の主観が中心だが、今後は科学的分析などで客観的にバイオ炭の強みを証明し、「環境に優しくおいしい南部ブランド」(竹下課長)の確立を目指す方針だ。

好影響は林業にも。発電所で使うのは、細かったり内部が朽ちていたりして、使い道がほとんどなかった「未利用材」。木材の調達、加工を担うグリーン・ワン(南部町)の樋口真之代表は「未利用材に価値が生まれ、地域の林業に追い風が吹いています。切った木がしっかりお金になれば、そのお金で森を管理して新たな木を植えることもできます。『切って、お金にして、植えて、また切

る』という健全な循環の実現が、ぐっと近づいてきました」と力を込める。

既存の価値観の見直しで木材の消費拡大につながる動きも活気づいている。その一つが林野庁の進める「ウッドチェンジ」だ。県内では県や県木材協会などが主体となり、コンクリート造などが主流の企業オフィスや公共施設、養護施設などに木を取り入れる木質化を呼び掛けている。

取り組み自体は長年継続しているが、SDGsをきっかけとした環境意識の高まりを受け、取り入れる企業・団体が増えている。旭陽電気(葦崎市)は2020年、創業50年のリブランディング戦略の一環として本社を県産スギ材でリノベーション。プラスの効果を実感しているという。

「木材を活用した職場をつくる。たったこれだけのこと



外部からコンサルタントを招いた会議で、森林の活用方法を検討する念場ヶ原山恩賜林保護財産区管理会の関係者ら(同管理会提供)

ですが、効果は絶大です。従業員からは『働きやすい』と好評で、『オフィスがオシャレ』という理由で志望してくれた学生もいました。取引先からの評判もいいですね」と同社担当者。県木材協会の大竹幸二専務理事も「社会全体に『木を使うことは良いこと』という意識が根付き始め、木質化がこれまで以上に企業・団体にとってメリットを生むようになっていくのではないのでしょうか」と分析する。

森林管理者の意識も変わり始めた。長野との県境にある恩賜林の管理を担う「念場ヶ原山恩賜林保護財産区管理会」(北杜市)は、活用を念頭に置いた森林の保全・管理方法の検討に着手。外部コンサルタントを招いて会議を重ね、今年5月に「レクリエーションや教育の場など、木材生産以外の形でも森林を活用し、収益性と地域の関心を高めていく」という方針をまとめた。

管理会の山本武夫会長は「森はかつて誰にとっても身近な存在でしたが、今は財産区の間でもその歴史や価値を知らず、管理が業者への丸投げになってしまっているケースもあります。その状況を変えたいの思いが出発点でした」と明かし、「取り組みを形にして周囲に広げ、一度離れた森と人の距離を少しずつでも近づけていきたい」と力を込めた。

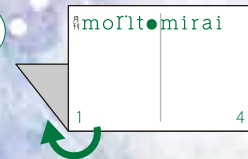
〓 おわり

# mirai

## 最終回

### この紙面の読み方

1



この面を  
表のまま  
二つ折りに  
します。

2



さらに上半分の面が  
表になるように  
四つ折りにします。

3



四つ折りにすることで  
冊子状の読み物になります。  
ファイルなどに挟んで  
保存してください。

月刊moritomiraiは今回で終了します。  
森に関する話題は今後も随時、  
特集紙面などで紹介する予定です。

本紙面は山梨の森林サイト  
「moritomirai」でもご覧いただけます  
企画制作：山梨日日新聞社広告局



[moritomirai.com](http://moritomirai.com)

